



ルノー、その系譜から紐解くトゥインゴの魅力

1993年の春、フランス製の小さなクルマがデビューを果たす。全長が僅か3m43cm、斬新なスタイリングと信じられないほど広い室内、まさに革新的なモノスペース・カーだった。大ヒットを記録するルノー・トゥインゴの先代モデルである。

そして、トゥインゴは欧州の人々のクルマに対する価値観を大きく転換させるきっかけとなったのだ。

時は流れて2008年、NEWトゥインゴが登場する。

中古車のスペシャリスト“認定中古車.com”が、先代トゥインゴを始めとするルノーの小型車の系譜を紐解きながら、NEWトゥインゴに宿るルノーのDNA、そして魅力に迫ってみたい。



今も大切に保存されているブローニュの森に佇む小屋。110年前にルイ・ルノーが使っていたアトリエだ。フランスを代表する巨大企業グループ“ルノー”はここからスタートした。

21歳の若者ルイ・ルノーが三輪のドディオ・トリシクルを改造した四輪自動車パリ・モンマルトルの坂を易々と駆け上ってみせたのが1898年のこと。これが二度の世界大戦をくり抜けながら巨大な自動車企業グループに発展するルノーの起源となる。彼の発明したシャフト・ドライブはまさに常識を打ち破る革新的なシステムだったのだ。ルイ・ルノーがアトリエに使用していたブローニュの小屋には即座に十数台の注文が舞い込んだという。そして造ったクルマが“タイプA ヴォワチュレット”。それは、シャフト・ドライブを採用した

初めての市販車だった。以後、ルイ・ルノーの既存概念にとらわれない“革新性”は、DNAのようにルノーからリリースされる各モデルへと受け継がれていくのである。さっそく、その系譜を三つにセグメントして紹介していこう。

革新性の系譜 その1 小型実用車編

ルノーは、第二次世界大戦の終結から1996年まで国有化されていたこともあって(1990年から株式会社/1994年にフランス政府持ち株比率が52.97%となり1995年には44.5%へと減少)、保守的なブランドというイメージを持つ方も少なくないと思う。しかし、歴代のモデルには創業者の持っていたDNAを受け継いだ革新的なクルマが多い。とりあ

えずハズせないのは、日本にルノーが根付くきっかけとなったキャトル(4)とサンク(5)である。まずは1961年に登場して32年にもわたり生産が続けられ、フランス乗用車史上最多の生産台数を記録したキャトルだ。このクルマを抜きにしてルノーの系譜は語れない。長年にわたり大衆に愛されたフランスの国民車と言えるだろう。

キャトルは週末だけ乗るクルマではない。毎日の生活のために使う実用車である。だから60~70年代は、「キャトルにそれほどの革新性はない」「ごく普通のコンパクトカー」と批評する評論家が多かったという。ただしこのクルマ、1992年まで生産が続けられた。しかも、ボディのデザインやパワーユニットなどのメカニズムはほとん

ど変更を受けないまま。すごい考えてみてほしい、1961年の道路環境や人々の生活が31年後にはどれほど劇的に変化したのかを。キャトルは、90年代の街中や高速道路を普通に走れ、人と荷物を載せて普通に使えたのである。気持ちよく回るエンジン、上級車並みの乗り心地を提供するサスペンション、大人4人が楽に座れる室内、優れた整備性と耐久性など、実はその普通にみえるひとつひとつに革新的なアイデアが散りばめられていたのだ。クルマを普通の人の生活に合わせて作る。そしてメンテナンスにかかるコストを抑えて長く乗ってもらおう。これを徹底的に追求していたからこそ、キャトルは32年間で約813万台が販売されるという偉業を成し遂げたのかもしれない。派手さはないものの懐がすごく深い。実はこれをルノーの各モデルが持っているのである。

ルノーを欧州NO.1のメーカーに押し上げたモデルといえばサンクだ。70~80年代の傑作と呼ぶにふさわしいモデルである。サンクなしではルノーのコンパクトカー、いやコンパクトカーそのものの歴史は語れない。1972年にリリースされたサンクによってコンパクトカーの理想的な形態とボディサイズが確立されたと言っても過言ではない。あのVWゴルフよりひと足早く登場しているのである。ボディ/シャシー/エンジン/サスペンション/デザインなど、サンクはすべてが革新性のかたまりだった。84年に第二世代のサンクに進化すると日本にも本格的な上陸を開始、日

本人にルノーというブランドを知らしめる立役者となった。もちろんサンクにも、普通の人々が気持ちよく生活するために使うクルマというマインドが確かに息づいている。最もルノーらしい名車として高く評価する人は多い。

90年代に入ると、ルノーの小型実用車は、お馴染みの

ルーテシア、メガーヌなどに進化を遂げた。パワーユニットやサスペンション、インテリアの上質感などは飛躍的にアップデートされているものの、もちろん創業者のルイ・ルノーから脈々と受け継がれているDNAはどのモデルにも宿っている。それは、“革新性”だ。すべては、普通の人々が気持ちよく生活するためのアイデア。そういえばキャトルは「クルマのジーンズ」と呼ばれていた。最新のルーテシアのキャッチコピーに採用してもびったりハマるのではないだろうか。これは半世紀にわたり、ルノーの小型車作りの軸足がぶれていないという証拠と言えよう。

革新性の系譜 その2 スポーツ編

ルノーは、世界最高峰の自動車レース“F1”に参戦していることからわかるように、レーシングカーやスポーツモデルの開発/生産にも情熱を注いでいるメーカーだ。このチャレンジ・スピリッツも、創業者ルイ・ルノーから受け継がれているもうひとつの系譜である。特に戦後は、ディエップに本拠地をおくアルピーヌとの関係を深めて、A110やV6ターボなどの名車を誕生させている。また、ハイパワーのアルピーヌ製ユニットを積むサンク・ターボ、ルーテシアにV6ユニットを叩き込んだルーテシア・ルノースポールV6など、数多くのコンプリートカーもリリースしている。2シーター・ミッドシップのルノースポール・スパイダーの存在も忘れるわけにはいかない。ところで、大半のモデルが国営企業時代にリリースされていることに驚く。WRCのホモロゲーション・モデルが多いとはいえ、どれも少量しか生産できないだろう。しかも、開発には膨大な時間と労力を費やしたはずだ。そこにはやはり、“革新性”というDNAが見え隠れするのである。少なくとも保守的なメーカーの成せる技ではない。それは、2リッター直4DOHCにターボを装着して224ps/30.6mkgという強大なパワーとトルクを発揮するメガーヌ・ルノースポールなどの現行型スポーツモデルに受け継がれているのである。



日本でも“日野ルノー”の名で馴染みの深い4CV(1947発売)。ちなみに、日本で最初にルノーの輸入元となったのは水嶋商会という企業。1910年に取り扱いがスタートしたという。



1961年の登場以来32年にわたり生産が続けられたキャトル(4)。デビューの頃“SUPER”に搭載されていた水冷747cc直40HVエンジンは32psを発揮した。



1972年にデビューして1984年に第2世代へと以降したサンク。まさに70~80年代を代表するコンパクトカー。日本では1.4リッターの“Super cinq”がヒットした。



1990年に登場したルーテシア。本国での名はクリオ。1998年にはスタイリングやエンジンなどを刷新して第2世代となった。現行モデルは2006年にデビューした第3世代。



クルマ好き垂涎のアルピーヌA110。デビューは1960年だった。1300系と1600系のふたつのモデルでラインナップを構成する。1.3リッターの1300Gの車重は僅か625kg!



革新性の系譜 その3 モノスペース・カー編

ルノーの系譜にはもうひとつの流れがある。モノスペースという考えから生まれたモデルだ。ここに、このコンテンツの主演、トゥインゴが登場する。その源流となるのは、1984年にマートラ・オートモビルとのコラボにより誕生したエスパスだ。モノコック構造、FRP製ボディ、洗練されたエクステリア・デザイン、優れたパッケージングによる広い室内と多彩なシート・アレンジ、派手さはないもののとにかく使いやすい。革新的なクルマとして高い評価を受け、好調なセールスを記録した。エスパスのコンセプトが、エクスプレスからカンゲーへ、またセニックやアヴァンタイムへ、そして先代トゥインゴからNEWトゥインゴへと枝分かれしていったと考えていだろう。ただし、各モデルの根底にあるの

は、普通の人々が気持ちよく生活するために使うクルマ、というルノー・マインドなのである。

さて、先代トゥインゴの話をしよう。日本に上陸を果たしたのは1995年、販売が終了したのは2002年だった。ファニーなスタイルと広い室内、そして気持ちいい走行感覚、手ごろな価格、これが大ヒットした4大ポイントになるだろう。スライドできるリアシートには大人が楽に足を組めるほどのスペースが用意されていたし、座席はフル・フラットにアレンジできた。トゥインゴがモノスペース・カーと言われる所以である。デザイナーとエンジニアの斬新なアイデアと情熱を商品化してしまうのがルノーなのだ。革新性というDNAを持っているメーカーだからこそ、この革新的なクルマを誕生させることができたのかもしれない。ところで、この小さなクルマの開発陣は単に売れるクルマとしてトゥインゴを作ったわけではない。あらゆる層からの支持を受けなければ、ほんとうの意味での“革新”ではなかったのだ。果たしてトゥインゴは、お金持ちかどうか、また年齢や職業の垣根を見事に越えてみせた。トゥインゴによってクルマがステイタスシンボルとなる時代は幕を降ろしたのである。その偉大さは、14年間で240万台以上が販売されたという数字より、この点にあ



1984年に登場した元祖モノスペース・カーのエスパス。その名は英語のスペースの意味を持つ。最上級グレードのGTXには2.2リッター直4が搭載されている。



エスパスと同様のコンセプトから1996年に誕生したメガーヌ・セニック。翌年には2リッター直4搭載モデルが上陸した。フロアパンはハッチバックのメガーヌと同じものを使用。



2002年に上陸を果たしたアヴァンタイム。モノスペース・カーながらクーペのカテゴリーに入る。207psを発揮する3リッターV6ユニットを搭載。5段ATを介して前輪を駆動。

と思う。フランスより15年ほど遅れたものの、日本にもようやくそんな時代が来ている気がする。



全長3430×全幅1630×全高1423mmのコンパクトなモノスペース・カーながら、室内は信じられないほど広い先代トゥインゴ。58psを発揮する1.2リッター直4エンジンを搭載。



NEWトゥインゴはノーマルのクイックシフト5とGTの2機種がラインナップする。クイックシフトとはその名のとおりに先代モデルで馴染みの2ペダルMT。ともに1.2リッター直4を積むが、GTにはターボが装着され100psを叩き出す。全長3600×全幅1655×全高1470mm。

Bonjour NEW TWINGO | 198万円で上陸!

ここまで読み進んでいただいた方なら予習は完璧! もう、NEW TWINGO がどんなクルマなのかが予想できるはずだ。とりあえず、先代のキープ・コンセプトであることは間違いない。とにかくとても気持ちよく走れるクルマに仕上がっている。洗練されたスタイリング、

グリーンと上質になったインテリア、懐の深いサスペンション、

活発にまわるパワーユニット、感覚的にはひとクラス上のクルマに乗っているようだ。先代と同様、リアシートをスライドさせれば大人が楽に足を組めた! そして何より、スポーティモデルのGTでさえも、クルマが人に挑みかかってくるような感覚がまったくない。これがポイント。のんびり走っても元気よく飛ばしても、安心して気持ちよく運転できる。この感覚こそが「ルノーらしさ」なのだ。そう、ニューモデルにも“普通の人々が気持ちよく生活するために使うクルマ”というルノーのマインドは受け継がれている。ノーマルの新車価格は198万円。「クルマはステイタスシンボル」という考え方は前時代的と思っている方には、ルノー NEW TWINGO が最適な1台となるだろう。

TEXT: 野田義彦



インストルメントパネルはルノーらしく斬新なデザイン。ひとクラス上の上質感を演出している。スピードメーターはダッシュのセンター、タコメーターはステアリングコラムの上に配される。グラスエリアの広さはルノーの法則どおり。だからとにかく明るい。



▶ もっと詳しい情報はコチラ



RENAULT IS MY LIFE

INTERVIEW 久保良光 (ルノー ネクストワン徳島 代表取締役)
TEXT 野田義彦

NEW TWINGOの魅力や歴代のモデルを紐解きながら掘り下げていこうという企画のまともに入ろう。となれば、その道に精通した人に話を訊くのが最もわかりやすくより確実な方法だ。できればズバツ！と明快に答えてくれる人がいい。認定中古車.comが白羽の矢を立てたのは、ルノー ネクストワン徳島の久保良光 社長である。彼とともに、ルノーの魅力、そして各モデルに息づくそのDNAの正体、もちろんNEWトゥインゴにも受け継がれた「ルノーの血統」などをじっくり紐解いてみたい。

サンク、エクспレス、アルピーヌ V6ターボなどが新車で販売されていた80年代後半、徳島県にルノーの正規ディーラーが誕生する。当時、営業担当として創業メンバーに加わったのがこの頁の主演「久保 良光」氏だ。それから約2年後の1990年、当時の社長はなんと店舗の閉鎖を発表する。当時はバブル景気で高級輸入車が飛ぶように売れていた。にもかかわらず、まったくその恩恵を受けることができなかったのだ。従業員は新しい就職先を見つけるのが普通なのだが、なんと彼は自らルノー・ディーラーを立ち上げる道を選ぶのである。

「故障しても大丈夫です。必ず修理します。そう言って販売してきましたから、お客様との約束を果たさなければならぬ、ただそれだけでした。商売のことなんてほとんど考えていなかったような気がします。でも、バブ

ルの頃でも販売台数が横ばいだったというのは、ルノーがどんな人に選ばれているクルマなのかということを端的に表していると思うんですよ。つまり、ステータスシンボルとして乗るクルマではない。俗に言う“バブリーな人”はルノーを選ばなかったということです。今でもそうです。そのあたりに、ルノーに乗る人の考え方とライフスタイル、そしてどんなクルマなのかというヒントがあります」

取材はウィークデーの昼間に行ったのだが、ルーテシアやカンゲーなどのオーナーが次々に来店して、珈琲を飲みながら楽しそうに談笑している。“あの”21年前、彼が売ったサンクにいまでも乗り続けているオーナーがいるというから驚く。久保社長は、そのサンクGLが定期点検のために入庫してくるのを楽しみにしていると話す。元気に走る姿を目にすると、自分でディーラー

を立ち上げてよかったと心の中で頷くそうだ。

「ドイツのプレミアムブランドには、ビジネスで成功した人はビッグセダンや高級SUVに乗る、みたいなヒエラルキーってあるじゃないですか。そういう人がハッチバックのコンパクトカーを選ぶというのをあまり聞いたことがない。でも、ルノーは違うんですよ。ルーテシアやカンゲーに乗る経済的に豊かな方も多い。大きいクルマが“偉い”とか“優れている”という意識は微塵もなく、気持ちよく使えて楽しく走ることができればそれでいいのです。逆に考えれば、ルノーのクルマは常にそんなことが開発コンセプトになっているような気がします。だから、日本のルノー・ディーラーにバブル景気はなかった(笑)」

厳しい時期もあったけれど、“ルノーに乗っている人が好きだから”ここまでやってこれたと、工場整備を受けているサンクやエスパスを見ながら穏やかな表情で話してくれる久保社長。

「ルノーの魅力って、わかりにくいのかもかもしれません。乗った瞬間のインパクトは弱いんです。だから、15分くらいの試乗では理解できないでしょう。でも、3日間つきあってみればきっとわかります。ドライバーズシートに座ると、ホッとしますよ。大きいウィンドーやウエストラインの低さ、シートの座り心地、素直なハンドリング、懐の深いサスペンション、エンジンの回



昭和33年10月26日生まれ。徳島県出身。ルノー ネクストワン徳島の経営母体である(株)ネクストワンの代表取締役。創業以来、20年以上にわたりセールスの最前線に立ち続ける経営者。趣味はスキューバダイビング、スキー、オートバイ。現在の愛車はルノー・カンゲー。「これが気持ちよく走るんですよ」と目を細める。



ルノー ネクストワン徳島は約500坪の敷地面積を誇る日本屈指の正規ディーラー。敷地内には新車ショールーム、工場、中古車展示場が並ぶ。中古車は常時約50台。ルーテシアIIとメガーヌII、ラグナII、カンゲーを中心に、アヴァンタイム、サフラン、ルーテシアIIルノースポール2.0、21ターボ、先代トゥインゴ、サンクGTターボ、キャトルなどの稀少車もストックしている。県内はもちろん、遠方からのお客様も多いという。

転感覚などが、渾然一体となってドライバーを包み込んでくれるのでしょうか。つまり、人がクルマに合わせるのではなく、クルマが人の波長に合わせているんですね。これって、単なるテイストという種類ものじゃなくて、もっと深いものなのかもしれません。ルノーは、普通の人に気持ちいいと感じさせるクルマをまじめに作り続けているのです。どのモデルにも、人を威圧するようなフロントマスクやインテリアのデザインは採用されていないでしょう。これこそが、ルノーのDNAです。NEWトゥインゴにもそれがあります」

なるほど、非日常を演出するのは容易なことだけれど、普通の人が生活するなかで運転が気持ちいいと感じさせるのは簡単なことじゃない、ということだろう。20年以上にわたりルノーの変遷を見続けてきた久保社長は、NEWトゥインゴにもその「気持ちよさ」が受け継がれていると核心をつく。

「NEWトゥインゴは、内外装のデザイ

ンと運転の楽しさが魅力です。そして、室内の広さ。なんと言っても、大人が後席に座っても余裕で足が組めるのですから。使いやすく気持ちのいいクルマです。特に疲れているときに運転すると、このクルマの“すごさ”がわかりますよ。間違いなく先代のコンセプトを踏襲していますよね」

ところで、この店舗の屋号はルノーネクストワン徳島という。普通ならルノー徳島だ。ネクストワンにはいったいどういう意味があるのだろう。

「幼い頃、TVを見ていて印象に残った



言葉なんです。ある外国の著名な映画監督がインタビューを受けていて、あなたの作った映画で一番いい作品はなんですか、との質問に、“ネクスト・ワン”と答えるわけですよ。“次に作る映画だよ”と。すごいなー！このオッチャン！！と思って(笑)」

久保社長に、ルノーで最も優れたモデルを問うと、予想通り「ネクスト・ワン」と、笑いながら答えてくれた。



取材協力
ルノー ネクストワン徳島
徳島県名西郡石井町石井城ノ内56-1
Tel.088-674-8341
営業時間：10:00～19:00 / 定休日：月曜日

▶ **最新在庫情報はコチラ**